

黙示録18章7-8節 「死をもたらす悲しみ」

1A 自分のいのちを握る方

1B 女王の滅び

1C 魂を売る女

2C 利用する女

3C 見捨てられる女

2B 身近な存在の大切さ

1C 財産よりいのち

2C 欲望より夫婦愛

3C 偶像より息

4C 放蕩息子が知る父の愛

2A みこころに従った悲しみ

1B 罪による呪い

1C 罪から来る苦しみ

2C 罪を悲しむ者

2B サタンによる迫害

3B とこしえの慰め

1C 苦しみにある慰め

2C 死後の安息

3C 世への裁き

4C とこしえの報い

3A 世の悲しみ

1B 持っているものの喪失

2B 消える華やかな光

3B 過ぎ去る世

本文

黙示録 18 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、前回、17 章まで来ましたが、今日の午後に、18 章全体を一節ずつ学びます。今朝は、7-8 節に注目します。「⁷ **彼女が自分を誇り、** ぜいたくにふけた分だけ、苦しみと悲しみを彼女に与えなさい。彼女は心の中で『私は女王として座し、やもめではない。だから悲しみにあうことはない』と言っているからです。⁸ これらのことのため、一日のうちに、様々な災害、死病と悲しみと飢えが彼女を襲います。そして、彼女は火で焼き尽くされます。彼女をさばく神である主は、力ある方なのです。」

1A 自分のいのちを握る方

1B 女王の滅び

私たちは 17 章にて、驚くべき幻を見ました。それは、地の王たちと淫行を働いている淫婦が、獣の上に乗って、金の杯から酔いしれている姿です。紫と緋色の衣をまとって、金と宝石と真珠で身をかざっています。そして、その杯には、聖徒たちと、イエスの証人たちの血が入っています。おぞましい光景です。

そしてここで読んだのは、その女が今、様々な災害、死病と悲しみで苦しんでいます。そして火で焼き尽くされています。主が、彼女に滅びに至る悲しみをもたらしたのです。今朝は、この世の悲しみに注目したいと思います。パウロが、コリント人への第二の手紙でこのことを語っていました。「7:10 神のみこころに添った悲しみは、後悔のない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらします。」

1C 魂を売る女

この女の特徴について考えてみましょう。彼女は、地の王たちを自分の客にしている淫婦です。主なる神は、女の人たち一人一人に、その女性という性に尊厳を与えています。その性は、一人の男のために与えられたものであり、結婚という結びつきで使うものです。そして、その性によって子を産むように造られています。ここには、神のくださった尊厳、言い換えれば聖さがあります。だれにも、侵されてはいけない聖なる領域があります。

しかし、それを富や権力のために売り渡しているのが、この女です。しばしば、日本語で「魂を売る」という言葉がありますね。まさにこれです。自分に与えられた大切なものを、大切なものとして守るのではなく、他のものにとって替えようとしてしまっているのです。

2C 利用する女

そしてこの女は、自らを「女王」としていますね。これは、自分は人が悲しむようなことを悲しんだことがない人です。あまりにも富や権力に守られて、自分が苦しみや試練にあったことがない状態です。高ぶりと言ってよいでしょう。

どうしてそうなるのか？それは、人を利用しているからです。彼女は、まことの信仰を持つ人々に血を流させています。人々を利用して、その人たちを押し潰して、それで自分自身は安んじて、貪っています。人を利用して自分の高い地位を確保しています。

3C 見捨てられる女

しかし、そんな利用する関係は、長くは続きませんね。これが、女が滅びる理由です。彼女は獣の上に乗って、安逸を貪っていましたが、ついに獣も他の王たちも彼女を憎みます。「17:16 あなた

が見た十本の角と獣は、やがて淫婦を憎み、はぎ取って裸にし、その肉を食らって火で焼き尽くすことになります。」

2B 身近な存在の大切さ

一人の男に自分の身を献げる結婚が教えるのは、「最も身近な人が、最も大切」ということです。私たちは、身近な大切なものを見ないで、そこに不満を抱き、外に遠くのことを大切にする傾向があります。この前、沖縄に行きました。沖縄の人たちが、県外の人たちが必ず観光で訪れるであろう、首里城に行ったことがあるか？を尋ねれば、ほとんどの人がないと答えます。なんともったいない！と思いますね。けれども、最近、友人であるアメリカ人の牧師が家族を連れて、東京に来ました。スカイツリーに行きました。そして日本に住む友人たちに、私も含めて、スカイツリーに行ったことがあるか？を尋ねたら、だれもいませんでした！私なんかは、スカイツリーは毎日、見ます！家から見えるんです。そんな身近なところにあるのに、上ったことがないんです。

1C 財産よりいのち

同じようなことが、生活の中で起こります。私たちは、いのちと財産は、どちらが大事ですか？もちろん命です。しかし、私たちは、命を犠牲にして、財産を得ようとします。イエスが言われました。「マタ 16:26 人は、たとえ全世界を手に入れても、自分のいのちを失ったら何の益があるでしょうか。そのいのちを買い戻すのに、人は何を差し出せばよいのでしょうか。」けれども、あまりにも簡単に、自分の命を救うイエスではなく、自分の持っているものを大事にすることが多々あります。

2C 欲望より夫婦愛

それでは、自分の伴侶、夫あるいは妻と、自分の欲望はどちらが大事でしょうか？けれども、世はあたかも、目の前の妻よりも、見目美しい女性を求めるように仕向けます。目の前の女性よりも、遠くで着飾った女性に目を留めます。あるいは、男性であれば、自分の心を許せる優しい人こそが、自分の求めている人だとして、毎日会う、男性をないがしろにします。ソロモンは息子に諭しました。「箴 5:8-9 あなたの道をこの女から遠ざけ、その家の戸口に近づくな。そうでないと、あなたは自分の誉れを他人に渡し、あなたの年月を残忍な者に渡すことになる。」

男性が女を買うのは、実は男性の尊厳も失わせていることになります。それを、ソロモンは、「泉を外に散らしている」と表現します。「5:15-16 あなた自身の水溜めから水を飲め。流れ出る水を、あなた自身の井戸から。あなたの泉を外に散らし、広場を水路にしてよいものか。」そして、こう続くのです。「5:18 あなたの泉を祝福されたものとし、あなたの若いときからの妻と喜び樂しめ。」自分の一生の連れ合いであり妻との時間を楽しみなさいと言っています。

3C 偶像より息

財産、相手の女性あるいは男性、また、もっともって根本的なことを説きます。自分の息は、どう

でしょうか？そんなの当たり前でしょ！と言うかもしれませんが。けれども、だれもが知っています。自分の息を、自分の努力や意識でやっていないことを。ところが、24 時間、私たちは一定速度で絶え間なく、息をしています。これは驚くべきことです。そう、神がそうさせておられるのです。

ところが、息を与えておられる方を認めず、他の目に見えるものを求めていくという愚かさを、人はしばしば表してしまいます。バビロンの最後の王ベルシャツアルは、エルサレムの神殿の器を使って、金や銀、青銅や鉄、木や石で造られた神々を賛美しました。それで預言者ダニエルが、その愚かさを説明します。「ダニ 5:23 それどころか、天の主に向かって高ぶり、その宮の器を自分の前に持って来させ、あなたと貴族たちとあなたの側室や侍女たちは、それを使ってぶどう酒を飲みました。あなたは、見ることも、聞くことも、知ることもできない銀、金、青銅、鉄、木、石の神々を賛美しました。しかしあなたの息をその手に握り、あなたのすべての道をご自分のものとされる神を、あなたはほめたたえませんでした。」

4C 放蕩息子が知る父の愛

そうですね、すべての良いものは主から来ます。息も、自分の連れ合いも、財産もすべては、主なる神から来ます。けれども、そこから離れて遠いところに行ったら、いざという時にすべてを失ってしまうのです。そのことを、イエスは放蕩息子の喩えで語られました。彼は父の家を憎みました。そして遠い国に行きました。そこで散財しました。しかし飢饉が来たのです。飢饉が来たら、彼は無一文になりました。彼の求めていたものは、いざという時に何にも役に立たず、すべてが亡くなってしまったのです。

彼が気づいていなかったのは、父の愛です。気前の良い父です。彼が戻ったら、父は彼を抱擁し、口づけし、息子が戻ってきたことでお祝いをしたのです。父の変わらぬ愛がそこにありました。

2A みこころに従った悲しみ

私たちは、天地を造られた方を父として、神としてあがめています。そして、神を敬うからこそ、抱く悲しみがあります。先に読んだパウロの言葉には、それを、「神のみこころに添った悲しみ」と呼んでいました。

1B 罪による呪い

1C 罪から来る苦しみ

その悲しみとは、世における悲しみは、人が罪を犯したことによって引き起こされていることを知っている悲しみです。アダムが罪を犯して、地が呪われたものとなったと主が言われました。人はこれこれがないから、人に悲惨なことが起こると言いますが、聖書ははっきりと、人が神に罪を犯したら、そうなっていると教えています。

2C 罪を悲しむ者

そして何よりも、自分自身が神に罪を犯したことを認め、その罪を告白して、悔い改めることが、神のみこころにかなっていません。イエスは言われました。「マタイ 4:4 悲しむ者は幸いです。その人たちは慰められるからです。」そうです、パウロが言ったように、みこころに添った悲しみは、「後悔のない、救いに至る悔い改めを生じさせます」ということなのです。

2B サタンによる迫害

しかし、罪を悔い改めて、神を敬っているからといって、それですべての悲しみが過ぎ去るわけではありません。むしろ、悲しみが増えることさえあります。それは、世は罪を犯すように仕向ける悪魔が、支配しているからです。そして、世ではなく神を愛そうとすれば、世は憎むからです。「ヨハ 15:19 もしあなたがたがこの世のものであったら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではありません。わたしが世からあなたがたを選び出したのです。そのため、世はあなたがたを憎むのです。」

ここ黙示録において、イエスの証しのゆえに苦しめられ、血を流す兄弟たちの姿が出てきます。それは、世のものを愛さなかったからです。

3B とこしえの慰め

しかし、世における悲しみは、みこころのゆえの悲しみは、必ず慰めがあります。

1C 苦しみにある慰め

まず、苦しみや迫害の中でも、主は決して、失ったままにすることはありません。「マル 10:29-30 まことに、あなたがたに言います。わたしのために、また福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子ども、畑を捨てた者は、30 今この世で、迫害とともに、家、兄弟、姉妹、母、子ども、畑を百倍受け、来たるべき世で永遠のいのちを受けます。」来るべき世で永遠のいのちを受けるだけでなく、今も、この世で、迫害の中でも何倍も受けると言っているのです。

例えば、家族に見捨てられても、教会こそが神の家族です。世において失われているものが、教会には見つけることができます。檀家制度による仏式の葬儀に、人はどれだけ家族や親戚の付き合いができているでしょうか？そこは、ビジネス化した葬式と、遺族の相続遺産の争いなど、醜さも見え隠れします。しかし私たちは、週ごとに主に会って集まっています。主にあって交わっています。この、生ける神の共同体は何にもかかげがえのないものです。

2C 死後の安息

そして、私たちはこの世において悲しみがあっても、死んで主のところで安息できます。黙示録 6 章で、イエスの御名によって殉教した人々が、いつ裁きを行われるのですか？と訴えている場面

が出てきます。けれども、同じように殉教する兄弟たちの数が満ちるまで、「6:11 しばらくの間、休んでいるように言い渡された。」とあります。どんなに激しい試練があろうとも、この肉体から離れる時は、必ず主がおられて、そこで休んでいることができます。

3C 世への裁き

そして、黙示録に何度となく約束されているように、自分を迫害する世に対して、主は必ず正しく裁かれるのです。「Ⅱテサ 1:6-7 神にとって正しいこととは、あなたがたを苦しめる者には、報いとして苦しみを与え、7 苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えることです。このことは、主イエスが、燃える炎の中に、力ある御使いたちとともに天から現れるときに起こります。」

4C とこしえの報い

そして最後、主は、必ず報いを与えてくださいます。この世において、神のみこころにそった悲しみは、決して消えていくことのない報いで慰めてくださるのです。黙示録の最後に、イエスの約束があります。「22:12 見よ、わたしはすぐに来る。それぞれの行いに応じて報いるために、わたしは報いを携えてくる。」

3A 世の悲しみ

これが、パウロが語っている、「神のみこころに添った悲しみは、後悔のない、救いに至る悔い改めを生じさせます」ということです。私たちが、世にある罪を悲しみ、悔い改めをもって世に生きている時に、神の救いにあるすべてのすばらしさにあずかることとなります。

では、今、世にある罪を楽しむ時にはどうなるのでしょうか？「世の悲しみは死をもたらします。」ということです。「一日のうちに、様々な災害、死病と悲しみと飢えが彼女を襲います。そして、彼女は火で焼き尽くされます。」と御使いが言っていますね。この悲しみは、慰めに変えられることはありません。そのまま死に至り、滅びに至ります。

1B 持っているものの喪失

なぜなら、すべてのものが焼かれてしまうからです。神からのものは永らえますが、この世からのものは過ぎ去るからです。自分に残されているものは何もなくなるからです。「Ⅰヨハ 2:16-17 すべて世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢は、御父から出るものではなく、世から出るものだからです。世と、世の欲は過ぎ去ります。しかし、神のみこころを行う者は永遠に生き続けます。」

すべての良きものは、神から来ます。しかし、神を知らない人、いや、知ろうともしない人は、園から来る良き賜物を、当たり前のものであるかのように受け取ります。ちょうどそれは、水道管か

ら水が流れているのに、流れている水を見て、当たり前だと思っているかのようです。その水道の蛇口が開かれているから、水が飲めるのに、そこから流れているものを見て、水道管の蛇口とか、そんな面倒くさいことは言わないでくれ、蛇口とか、私たちに強制しないでくれと言います。あまりも、滑稽であります、真面目に多くの人がそのことをしています。

主が、蛇口から水を出すのをやめる時に、自分が持っていると思っていたことまでもが取り上げられるのです。タラントの譬えを思い出してください。一タラントを受け取ったしもべは、地の中にかくしました。主人にそれを話しました。主人は、「マタイ 25:29 そのタラントを彼から取り上げて、十タラント持っている者に与えよ。だれでも持っている者は与えられてももっと豊かになり、持っていない者は持っている物までも取り上げられるのだ。」と言います。

お金は、運用しなければ無益だということは知っているでしょうか？ 当たり前のことですが、多くの方が知りません。筆筒に現金が入っているだけでは、ただの紙切れです。その紙切れが、これだけの価値があるという共通認識があるから、それで他のものに代えることができます。ところが、筆筒に入れていて、それで何か価値があるかのように勘違いする人たちがいます。それと同じで、自分の人生に良いものが与えられている時に、その良いものが神から来ているということ拒み、神に何も関わろうとしなければ、神の栄光が現れません。それはただの紙切れのように無益になります。それで、神は取り上げられるのです。

2B 消える華やかな光

私たちは、神ではなく、世にあるものを求める時に、このように消え去ることを知らないといけません。バビロンが一夜にして、その華やかさがなくなります。それと同じように、世にあるものは、はかなく、空しいのです。

預言者ダニエルに対して、主は、「12:3 多くの者を義に導いた者は、世々限りなく、星のようになる。」世にある栄光は、ちょうど花火のような輝きです。神にある輝きは星のそれに似ています。花火大会に行ってください。その時は、最も輝いているのは花火の輝きです。人々はそれに見とれます。けれども、それが終わった後、もし花火だけの光を見ていたら、なんと空しく、淋しいことでしょうか！ 多くの人が、このように世にある輝きだけを求めているのです。

しかし、花火の輝きがなくなった時にこそ、その夜空には、いつも輝いている星が見えるのです。これが、永続する栄光です。主の与えられる満ち、主の与えられる報い、主の与えられる救いです。このようにして、世の悲しみは死に至り、滅びに至りますが、主にある輝きは、いつまでも続くのです。しかし、世にある時は、光輝くどころか、その光に消されて、見捨てられた物のようになることもあるし、人目につかないのです。

3B 過ぎ去る世

最後に、パウロが結婚について助言している箇所を読みます。先日、私たちはちょうど結婚式をお祝いしたので、相応しい箇所です。コリント第一 7 章、「7:29-31 兄弟たち、私は次のことを言いたいのです。時は短くなっています。今からは、妻のいる人は妻のいない人のようにしていなさい。30 泣いている人は泣いていないかのように、喜んでいる人は喜んでいないかのように、買う人は所有していないかのようにしていなさい。31 世と関わる人は関わりすぎないようにしなさい。この世の有様は過ぎ去るからです。」

私が、あるクリスチャンの男女の結婚式に参加した時、何人かに祝辞を頼まれました。私の前の人々は最後の挨拶に、「末永く、お幸せに」と言っていました。私は敢えて、こう言いました。「短いですから、大切にしてください。」本来、結婚はこの地上のものだけです。それはキリストと教会を表しているものです。その役目を終えたら、私たちがよみがえった時はめとることはせず、御使いのようであるとイエスは言われます。20 代で結婚したら、80 歳で死んだとしたら、たかが 60 年です。その後で、千年、万年、億年、いや何兆年、いや永遠に、主の前に生きるのです。だから、とっても短いのです。

それで、この世については、「付き合いが、軽く」ということがわかります。主にあって、与えられたものがあります。幸せな結婚だったり、与えられた財産もあり、自分の能力や人生の目標などあるでしょう。しかし、それらは主にあって、与えられているものであり、やがてなくなるのです。そのことに思い煩い、最も大切な、主ご自身を置き去りにしたら、その一時的なものと共に自分は滅んでいってしまうのです。それが、この女の姿です。